

村山 鉄次郎

研究課題 日本体操史の研究

発表誌・発行所 明治大学教養論集

表題 日本における体操の歴史—その2—

梗概 今年度の研究は、前年に引き続いて明治時代後半からの日本体操（器械体操を中心とした）の発展状況について資料収集を行なった。

明治時代の後期には、わが国のラジオ体操や徒手体操の原型をなすスウェーデン体操が輸入され、それまでのいわゆる普通体操にとって変わることの特長が見出される。

その頃のスウェーデン体操そのものは、単に徒手体操のみではなく、跳馬や横木や肋木など各種の器械を多用する運動が盛んに行なわれるように作られている。

従って、器械体操もこの体操の影響を多大に蒙ったのであるが、概して受けた影響というのは姿勢であった。スウェーデン体操はリングの考案になるが、当時のスウェーデンには猫背で姿勢が悪く健康を害している人々が多く、これを矯正すべくリングは胸を張り、背骨を真っすぐにする運動を取り入れたのであった。これはこれで、当時の北欧で大きな成果を挙げたことから高い評価を受けたものであった。

ところが、昭和初期を頂点として巻き起ったスウェーデン体操批判の主な主張は、この最も基本となる姿勢があまりにも胸を張りすぎる点に向けられているのである。即ち、胸張りを強調し過ぎて硬直した姿勢は、人間が本来持つ複雑な運動に対する柔軟な対応に欠け、むしろ不器用さを生み出しているという批判である。

このような批判は、ドイツをはじめとするヨーロッパに起った議論を起点として、わが国の体操研究者や海外留学生などの間でも湧き起り、新しい運動の紹介がなされるようになった。そのひとつとして最大のデモンストレーションはニールス・ブックの招聘であろう。

このニールス・ブックの体操は、弾みを強調した非軽

に弾力的な体操であった。しかしこれはこれでまた、筋肉の酷使という理由で児童の運動には向かないとの批判がなされたものである。ただし、ニールス・ブックの体操は、彼の主張する通り北欧の農村青年向けに考案されたものであったので、この批判はあたらぬ。とはいえ、この体操が学校体操に影響を与えなかった訳でもない。

結局、前述のスウェーデン体操とニールス・ブックのデンマーク体操とは混合してわが国の徒手体操に大きな影響を与えたと言われている。

ところで、競技としての器械体操の方はどうかといえば、明治の後期から競技され始めたが、昭和初期まで競技形式が原始的で、運動の技術の質的な争いというよりは、技を使った量的な争い（鉄棒弾道幅跳びだの、倒立距離競争などといった競技のしかた）であったり、技の持ち駒の争いといったものであった。しかし、やがてロスアンゼルス・オリンピック大会に参加することになり、競技形式も整い始めて採点方法に変化をきたすことになった。この新旧採点法の交替過程において若干の軋轢が発生するが、オリンピック大会を期に当時の国際ルールが浸透していったと考えてよからう。

これらについては、明治大学教養論集に発表する予定である。